豊かな未来社会の実現に向けて
～地域と共に発展する秋田大学～

（話し手）国立大学法人秋田大学　学　長　南谷　佳弘　氏
（聞き手）一般財団法人秋田経済研究所　専務理事所長　佐藤　雅彦

佐藤　本日は大変ご多忙のところ、新春インタビューをお引き受けいただきまして、誠にありがとうございます。秋田大学は県内唯一の国立大学であり、これまで秋田県の経済や産業など様々な分野で地域に貢献されており、人材の輩出も含めて、秋田県にとって欠かせない重要な大学です。今年４月に南谷学長が就任され、これからの大学運営について様々なことを考えていらっしゃると思います。秋田大学の取組内容や目指す姿などについてお伺いしたいと思います。本日はどうかよろしくお願いいたします。

１　学長就任にあたって

（１）学長就任までの略歴

佐藤　はじめにこれまでの略歴についてお聞かせください。

南谷学長（以下、敬称略）　私は東京で生まれて東京で育ちました。昭和37年生まれです。55年に秋田大学医学部に入学しまして、61年に卒業しました。その後、そのまま秋田大学で研修してから、昔は第２外科といったのですが、今の胸部外科に所属して、専門は肺がんの外科をやっております。そして大学院に入って、卒業

して１年後ぐらいでしょうか、アメリカ･ニューヨークのコロンビア大学に２年間留学しまして、戻ってきてあとはずっと大学にいます。

そして助手、講師、助教授になり、胸部外科の教授になって、その後、平成31年４月から病院長を５年間やっていました。病院長になって１年したらコロナになって、５年間の病院長の任期中４年間はコロナとともに過ごしていました。最初は何が何だか分からなかったので、結構大変でした。コロナがようやく落ち着くとともに、この４月に学長になりました。

佐藤　ご出身は東京ということですけれども、一部留学の時期もございましたが、基本的には秋田県人ということですね。

南谷　そうですね。心もほぼ秋田県人になりました。ほぼと言うと、ちょっと失礼かもしれませんけど。

（２）学長として目指す姿、叶えたい夢

佐藤　４月に学長になられましたけれども、学長として目指す姿や、叶えたい夢はどのようなものでしょうか。

南谷　私は今まで医工連携をやったり、手術が好きだったりして、夢はある程度実現してきたので、次は秋田大学に入ってくる学生、研究者、それから事務の方も含めて、この人たちの夢を後押しするのが今の一番の夢ですね。

（南　谷　学　長）

佐藤　今までのような病院長としての、医師としての夢というよりも、今度は大学全体を見る経営者としての夢ということですね。

（３）新入生に語ったこと

佐藤　今年の４月に入学式がありましたが、初めて学長の立場として新入生を迎えられたときに、どういったことをお話しになられたのでしょうか。

南谷　まず一番は、秋田大学を選んでくれてありがとうございますということです。大学も競争が厳しくなっていますし、学生は秋田の方だけではないので、大学院生も含めて秋田大学に入ってくれてありがとうございますというのが一番の私の言葉です。

あとは、入学してくれた方々はいろいろな夢を持って来ていると思うのです。例えば医学部であれば医師になっていろいろやりたいとか、理工系であれば研究者になりたいとか、企業で働いてみたいとか、いろいろな思いで来てくれていると思うので、その人たちが夢を実現できるような形で頑張ってくれたらと思っています。

それから、今は学校の先生が過重労働や教員不足などでつらい時代になっているのですが、少なくとも教育文化学部に入ってくれた方々は学校の先生になろうと思って入ってきてくれているので、そこは夢が叶えられるようにするのが私の仕事だと思っています。

２　秋田大学の体制について

佐藤　秋田大学は国際資源学部、教育文化学部、医学部、理工学部の４学部ありますが、開学から様々な歴史を経て今の秋田大学になっていると思います。秋田大学は相当歴史も古く、大学の開学から現在に至るまでの歴史や歩みについてお聞かせください。

南谷　秋田大学は昭和24年に新制大学として発足しました。戦後どこの大学も一緒に新制大学としてできたのですが、その前から秋田師範学校と秋田青年師範学校は教師を育てる役割としてできたことと、これは全国的にも珍しいと思うのですが、秋田県はその昔、資源が豊かな県だったので、鉱山の専門学校として秋田鉱山専門学校ができたことが母体となっています。

この前、長崎の出島の博物館に行ってきたのですが、日本地図の中に院内と小坂の名前がローマ字でちゃんと書いてあって、こういう歴史があるから秋田県に鉱山の学校ができたのだろうと思って、ちょっと驚きました。

医学部に関しては、日本全国の地域で医師不足が深刻だったということがあって、古い大学にはもちろん以前からありましたけれども、新設の国立大学としては初めて秋田県にできました。そのために秋田県全体で動いたという話も聞いていますし、かなり県民の強い思いでできた医師養成のための医学部だと思います。

そして資源系は、それぞれ様々な秋田県の要請や教育体系、求められる人材が変わってきたこともありまして、鉱山学部というのは非常にいい名前だったのですが、平成10年に工学資源学部になって、今は国際資源学部に名前が変わりました。ここはかなりユニークな教育をしていて、教育を全部英語でしているのです。そして学生には資源国に勉強しに行かせています。国際資源学部は日本の学生だけでなく、特に大学院レベルではそうした資源国からたくさんの留学生が来てくれていて、この学部はインターナショナルな学部になっています。

佐藤　留学生の数も一番多いし、こちらから外国に一定期間、学生全員が行くということで、国際交流が結構盛んな学部になっているということですね。

南谷　そうですね。特にＪＩＣＡ（国際協力機構）で一番協力しているのは秋田大学ということで、先日協定を更新したところです。そういった意味では、秋田県の資源というよりは日本全国の資源関係の教育拠点として、かなり有名なところだと思います。

３　令和７年度からの学部の新設・改編等

（１）学部の新設・改編等に至った理由・狙い

佐藤　令和７年度から学部が新設・改編されますが、今回の学部の新設・改編などに至った理由・狙いについてお聞かせください。

南谷　理工学部に関しては、今まで秋田県内で一般的な理工学部の学生を育てるところがなかったので、電子や機械などの分野の学生を育てるところだったのですが、社会全体がＧＸ（グリーントランスフォーメーション）や脱炭素といったところを目指しているので、そういう人材を養成してほしいというのがすごく大きな流れとしてあります。特に秋田県は風力発電や再生可能エネルギーに関連する企業も入ってきていますし、大学としても地域貢献のところでそういった研究、それから人材養成の面で応えていかなければならないと考えています。総合環境理工学部への改組はそのような方向性を目指したものとなっています。

（佐　藤　所　長）

佐藤　世界が求めているものを、大学側としても研究も含めて人材を輩出して貢献していくには、やはり従来の学部というよりは総合環境理工学部という専門の学部を作って教育していくということになるわけですか。

南谷　そうですね。もう一つは、ＩＴ人材がものすごく不足しているということなので、日本全国で情報系の学部がたくさんできつつあるのですが、その中でも少し特色を持った形で、元々いた教員にロボティクスやＶＲ（仮想現実）やＡＲ（拡張現実）などを得意にしている先生たちがいますので、そちらに少し特色のあるようなＩＴ人材を養成するところが情報データ科学部です。

佐藤　秋田県は生産年齢人口が減っている中で人の増強ができないとなると、どうしてもＩＴ化やＤＸ（デジタルトランスフォーメーション）といったものを進めていかないといけません。企業が必要な人材を採用できないということになると、そこに対して大学側としてもそういった専門的な人材を輩出していきたいということになるわけですね。

南谷　はい。あともう一つ、先日ある企業の方に言われたのは、既に働いている方々でも、どうしてもＩＴやＡＩにアレルギーがあると言うのです。ただ、その方たちもそういう知識を使っていかなければならなくなるので、実際に働いている方たちにＩＴやＡＩを、本当に専門的な細かい研究者というよりはリスキリングというか、学び直しの形で教えていただきたいという要請も受けています。

佐藤　大学に対するそういう希求が相当強いということなのですね。

（２）改編する教育文化学部の概要

佐藤　教育文化学部も改編されますが、教育文化学部というと、秋田県の教育界には教員の輩出という面で多大な貢献をされてきましたし、加えて秋田県は小学校あるいは中学校で全国的にもトップレベルの学力を有しています。その一つには教える側の能力の高さということもあり、その中心的な人材を担ってきたのが秋田大学の教育文化学部だと思いますけれども、どのような形になるのでしょうか。

南谷　教育文化学部には学校教育課程と地域文化学科というのがありまして、元々は教育学部だったのですけれども、現在は発展する形で、教員を養成するような学校教育課程と、卒業した後に県内の行政機関や教員以外の領域で活躍する人材を養成する地域文化学科に分かれております。例えば臨床心理士のように、今はうつになったりノイローゼになったりする方々が社会全体で増えているので、それに対応するような資格を養成する「心理実践コース」というのもありますし、そういった形で地域の課題を見つけて解決する人材を育成するところと、二つに分けて教育しています。

学校教育課程には、現在、「教育実践コース」、「英語教育コース」、「理数教育コース」、「特別支援教育コース」、「こども発達コース」の５つのコースがありますが、これを「初等中等教育コース」、「特別支援教育コース」、「こども発達コース」の３つのコースに改編します。「教育実践コース」、「英語教育コース」、「理数教育コース」の３つのコースに分かれていたものを「初等中等教育コース」という１つのコースにすることで、教員養成のための教育体制の一体性を高め、これからの時代の学校教育に対応できる、いっそう高い資質を備えた教員の養成を目的としています。優秀な教員を養成するということでは、さらに教職大学院や教職高度化センターといったところで育成しています。

佐藤　つまり、教員養成というのは、コアな部分として地域に貢献をする人材についても、輩出していくことが狙いということですか。

南谷　そうですね。

佐藤　よく分かりました。

４　地域課題への取組みについて

（１）地方創生センター等の活動について

佐藤　秋田大学は様々な分野で地域に貢献されていますが、地方創生センターをはじめとした各センターでは地域課題への取組みという部分でどのような活動を行っているのでしょうか。

南谷　例えば地域住民に対する公開講座を行ったり、最近は災害がいろいろな所で起きているので、特に地球温暖化で大雨になったり、そういった防災的なことにも取り組んでいます。

あとは、秋田県は自殺率が全国的に高い県でもありますので、自殺予防総合研究センターを作り、自殺をする人が減るような取組みをしています。

それから、北秋田市、男鹿市、横手市に分校を置いて、特色ある学習支援も行っていますし、医学関係では、メディカル・サイエンスカフェというものをやっていまして、県民に向けて健康や医療に関する話題を分かりやすく説明するような活動もしています。

もう一つ大きいこととして、これは理工学部と一緒にやっている企業もあるのですが、新しい素材を開発したり、特に航空機産業などに貢献するようなこともしていますし、電動化システム、航空機に使うような新しいモーターの開発を行ったり、秋田県の産業に資するような研究を行っています。

そういった地域貢献、住民や企業が求めるもの、秋田県の産業振興で役に立つようなことに取り組んでいます。

（２）ＡＩ研究推進センターの活動について

佐藤　デジタル社会やＤＸへの対応というのは、特に人口減少が顕著な秋田にとっては非常に重要であると考えています。そういった意味では、秋田大学に対する県民の希求は非常に大きいものがあると思いますが、ＡＩ研究推進センターではどういった内容の研究をされているのでしょうか。

南谷　今は本当に様々な分野でＡＩが入ってきていますので、学生にもＡＩを理解できるような形で授業をしています。研究でもあらゆる分野でＡＩが入ってきているので、それに資する研究も行っていますし、あとは皆さんＡＩに対して何となく怖いというイメージがあるかもしれないので、そこに関して違和感やアレルギーを持たないように社会人に対する教育もやっていくことになっています。

佐藤　秋田県はＡＩの活用に力を入れていかないとなかなか将来生産性が上がらないと思いますので、そうした意味で秋田大学に対する期待は非常に大きいものがあります。

（３）再エネ分野で取り組んでいること

佐藤　もう一つ大きなテーマとして、いわゆるグリーン社会の実現があります。再生可能エネルギー分野で大学に求められる期待も非常に大きいものがありますが、人材育成や研究に取り組んでいることがあればお聞かせください。

南谷　例えば風力発電で作った電気は、作り過ぎてしまっていて、発電を止めている時間があるそうなのです。それは非常にもったいないので蓄電の技術も必要ですし、余剰電力を水素に転換して水素をアンモニアに換えるなど、そういった形でエネルギーを別の形に換えていくことはこれから必ず必要になってきます。能代市にはＪＡＸＡ（宇宙航空研究開発機構）もあり

ますし、そこでは水素エンジンでたくさんの水素を使っているので、かなり水素の研究が進んでいます。秋田大学にも水素の研究者がおりますし、アンモニアの研究者もおりますので、風力発電で作った電気をどう使っていくか、再生可能エネルギーを別の形に転換して、使いやすくしていく研究も必要になってくると思いますので、そちらの準備を今進めているところです。

５　グローバル人材の育成

（１）グローバル人材育成の概要

佐藤　国際資源学部ではグローバル人材の教育を行っていますが、海外の教育・研究機関との人的な交流、あるいは研究交流に向けた大学間の協定、海外拠点の設置などについてお聞かせください。

南谷　令和６年５月現在で41か国・地域から278名の留学生を受け入れています。国際資源学部では資源を有する国、特にアフリカや中央アジアからの留学生が多いのですが、そういった資源国からたくさん受け入れています。国際資源学部では博士課程の７割が外国人ということで、かなりインターナショナルな学部になりつつあります。

佐藤　博士課程の７割ですか。

南谷　博士課程の後期課程です。それから英語教育にも力を入れていて、全学部でＴＯＥＩＣの試験を受けさせていて、それを進級の条件にしています。そこをクリアしないともう一回やり直しになります。英語はこれから必ず国際交流などで必要になってきますので、力を入れています。

佐藤　それは理工学部や教育文化学部、医学部もでしょうか。

南谷　はい、全部です。これは前学長の取組みなのですが、いずれ日本の18歳人口が減るときが必ず来るので、そのときに大学としては外国人材をたくさん受け入れなければいけません。10年後ぐらいを目指して、学内自体、英語を公用語にして、そうやって外国人材を受け入れて、優秀な方は日本に残っていただくという教育をしていかなければいけないので、そういったところを目指しています。

佐藤　全国的に人手不足ということもあって、企業は外国人材を受け入れています。ただ、秋田県は外国人材の受け入れ人数が全国で最下位です。そうした意味で、秋田大学でグローバルな人材をこれから受け入れていくのは、県内にプレゼンするということからしても結構大きなものがあるのではないかと感じました。

（２）グローバル人材の育成・国際交流の特徴

佐藤　グローバル人材の育成あるいは交流の面で特徴的なものとして、国際資源学部は海外のフィールドワークというのがあるのですが、これは全員が必ず外国に行くのですか。

南谷　はい。国際資源学部の学生は全員外国に行くことになっています。

佐藤　そうすると、モチベーションが上がって、目付きも変わって面白いかもしれないですね。

南谷　そうですね。成長して帰ってきてくれるものと期待しています。

６　地方医療への貢献について

（１）医師不足への対応策

佐藤　秋田大学の医学部が秋田県の医療の発展に果たしてきた役割や実績は非常に大きいものがあると考えていますが、一方で秋田県に限らず日本の地方圏では医師不足という問題が存在しています。秋田大学医学部が県内で唯一の医師を育てる国立大学ですので、大学としての対応策のようなものがあれば教えてください。

南谷　国立大学なので、秋田の人だけではなく、全国から学生が来ています。特に人口の割合もあるので、首都圏から来る方もそれなりに多いのです。東北地区の方も多いのですが、どうしても最近はお子さんに親元へ帰ってきてほしいという希望もあるので、今までは卒業するとかなりの割合で地元に戻っています。

そうした中で秋田大学を卒業する方々にも多く秋田県に残ってほしいところもあるので、特に秋田の人には、地域枠という形で29名の募集をずっとやってきました。けれども、それだけでは少し足りないところもあります。例えば弘前大学では医学部の定員の６割が地域枠ですので、60～70名が残っています。

そのときに一つ問題になったのは、青森県なら青森の人で、医師になっていくための学力を伴った学生を入学させられるかというところが大きな問題だったのですが、実際に教育がしばらく進んで国家試験が終わってみると、別に地域枠の学生と一般の枠で採った学生の学力にそれほど差がないことが分かってきました。それなら秋田県でも地域枠をもう少し拡充してもいいのではないかということで、地域枠だけでなく東北地域枠を作る予定です。東北地域枠を作って、できるだけ秋田県で医師として活躍していただく方を増やそうと思っているところです。令和７年度の入試から、秋田県の地域枠に加えて、東北地区の学生を集めるための東北地域枠を作る予定になっています。

佐藤　秋田県に一定の医師に残っていただくということでいえば、効果的な施策ではないかと思います。

（２）高齢者特有の疾病の治療・予防

佐藤　秋田県は少子高齢化が最大の課題となっていますが、高齢者には特有の病気があります。秋田県はがんの死亡率や脳疾患系の死亡率が全国で１、２位と大変高いのですが、高齢者特有の疾病の治療あるいは予防に関して、秋田大学として取り組んでいることにはどういったものがあるでしょうか。

南谷　秋田大学の高齢者医療先端研究センターでは、特に認知症や肺炎など高齢者特有の病気に対応するために、県からの補助も頂きながらそうした疾患を研究し、治療や診断をするような医師を雇っています。

（３）理学・工学との連携の背景や狙い

佐藤　医学が発展して地域貢献を行うには、医療従事者、特に医師だけではなくて理学あるいは工学といった他分野にわたる連携が必要になってきます。先ほど学長からも、理学あるいは工学との連携ということで医理工連携の話がありましたが、その背景や狙いはどういったものでしょうか。

南谷　皆さんどうしても医学の発展には医学の研究が重要だと思うかもしれません。それは土台としてありますけれども、その中で、例えば手術をするときにはロボットを使ったり、検査をするときの内視鏡にはＡＩの技術が導入されたりしていて、医学以外の理学・工学の発展が基盤になっています。そうした中で理工学の先生たちは、医療で何が必要かというところに対する知識がないわけです。

ですので、医学部と理工学系の研究者が協力して、例えば医学分野ではこういうニーズがある、工学系ではこういうシーズがあるというのをマッチングすると、新しい医療を作っていくことができます。医学だけ、理工学だけではできませんので、そこの連携が必要だということで、私としては医工連携に特に力を入れてやってきました。

（4）先進ヘルスケア工学院の概要

佐藤　医工連携を具体的に推進するのが秋田大学の先進ヘルスケア工学院ということになりますが、具体的にはどのくらいの規模なのでしょうか。

南谷　理工学部の学生の中で特に優秀な学生が入ってきてくれていますが、10名規模ぐらいです。そんなに多くないのですが、その学生たちは非常に優秀でやる気のある方たちなので、いろいろな新しい芽が出てきているところです。

佐藤　昔はこういうものはなかったのですか。

南谷　個別に連携することはあったのですが、こういった組織として連携することはありませんでした。

佐藤　では、組織としてやるのは期待が持てるところがありますね。

南谷　例えば工学系の先生たちが新しい医療のことをやっていても、それが本当に医療の方を向いているかというと、気が付くと全然違う方向に行ってしまったりするので、それを私たちが一緒になって、学生が行う研究に関しても一緒に育てていく感じになると、いい形で新しい医療に役立つような工学系の進歩になると思います。

（5）地方医療への対応やその他の特徴

佐藤　地方医療への対応について、医学研究面以外で何か特徴的な取組みがあれば教えてください。

南谷　人口減少に合わせて、地方のクリニックや開業医の先生たちは廃業せざるを得ない状況にあります。地域で患者さんを直接診ていた医師も減ってきています。そうなると、患者さんはだんだん遠い所から医療機関に通わなければならなくなるのに、逆にそういった所には高齢者が多いので、自分たちで移動することが難しくなってきます。

それを今度は医療側がそこに赴き、往診だけでなく医療機能をきちんと持った「医療ＭａａＳ」という、動く診療所、移動スーパーの医療版なのですけれども、秋田市から今年度補助を受けて医療ＭａａＳ車両を作りました。もうすぐ秋田県からも補助を受けて２台体制になります。仙北市でも既に医療ＭａａＳを導入していますが、大学病院の医療ＭａａＳ車両は専門的な医療ができる装置を積み込んだ移動車両になります。

佐藤　専門的な医療ですか。

南谷　一般的に出回っている車両には、遠隔診療ができるような医療機器をあまり積んでいないのです。しかし、大学病院で新たに作った車両は、採血した後の検査や、心電図や超音波などの検査もできる医療機器を積んだ車両で、実証実験の段階ですけれども、それを使って専門的な診療をご自宅に近い所でできる仕組みを作ろうとしているところです。

佐藤　それはすごいことですね。

南谷　全国的にも大学病院が移動診療所の仕組みを作っているのは珍しいと思います。

佐藤　秋田県の場合は、どうしても高齢者が増えていて、医師も特にへき地にはいないということになると、大学の果たす役割は非常に大きいものがありますので、そういった移動車を使った診療の仕組みができるということですね。

７　大学による資金獲得について

佐藤　大学運営についてですが、大学への交付金が少なくなるなか、国の財政難と相俟って、大学の運営にあたり大学自らが資金を獲得していくことが求められる時代になりました。全国的に見ると国立大学でも授業料の値上げという動きも一部であります。

先日の報道では、秋田大学は値上げしないということでしたが、財政的にも決して楽ではないと思います。研究・運営資金を自ら獲得するために、国あるいは地方公共団体などの競争的プロジェクト資金の獲得というものがありますが、どのような形で外部資金の獲得に取り組んでいく方針でしょうか。また、既に取り組んでいることがあれば教えてください。

南谷　まず授業料を値上げしないのは、教育機会の均等といいますか、東北地方はどうしても世帯収入が首都圏と比べてやや低いので、そういった方たちにとって授業料のちょっとした値上げはかなり大きいことだと思います。教育機会をみんな平等に持つために、東北地方の大学は値上げしないということで一致しているところです。

そのためには、国からの交付金が減っているので、それに代わる資金源といいますか、収益を上げなければいけません。国の補助金、プロジェクトに対する資金、あるいは企業などの外部資金、競争的な資金を得なければいけないので、そういったところに力を入れていかなければいけないと思っています。特に、学長の仕事は夢を叶えられるようにすることです。お金がないと夢を叶えられないので、外部資金を集めるのも私の仕事だと思っています。

秋田大学は大きな大学と比べると実際の研究者の数も少ないので、全て同じような配分で満遍なくやっていくと、突出した特色のある研究がなかなかできなくなってしまいます。そこはある意味尖った部分を作って、幾つかの分野に力を集中して、その分野でいい研究ができれば外部の資金、例えば国のプロジェクトも通りやすくなりますし、企業から見ても秋田大学はこんなに優れた研究をしているのだということを見ていただけますので、こちらからもアピールして、そういった形で外部資金を得ようと思っています。

再生可能エネルギー関係、素材関係、バイオサイエンスと医療関係も一つの領域です。そういった補助金を得るために、一つは内閣府の「地域中核大学イノベーション創出環境強化事業」に採択されまして、ここでは航空機に使う次世代モーター、軽量化したモーターの開発を、秋田市の種平小学校の跡地を使って行っています。ここはかなり注目されていて、全国的にもここにしかないものです。飛行機がそこにあるわけではないのですが、実際の飛行機と同じような形に模したものを使って、どういうふうに配置したらいいか、モーターの開発をどうしたらいいか、研究しています。あとは新しいモーターを作って評価をしなければならないので、それを評価する仕組みもあります。これは秋田大学だけでやっているのではなく、全国の企業の方にもそこに試しに来て頂いて、オープンにした形の評価ラボを運営しています。新たに今回も継続で国の資金を得ることができたので、これからどんどん発展していくところだと思っています。

もう一つは、いろいろな産業で新しい素材が求められているところがありますので、その辺の新素材や機能性の材料、特に航空機で使う炭素素材や自動車に使うような部品を作ったりして、新素材の開発にもかなり力を入れています。

それから、ＡＩはかなり競争が激しい分野であり、これから考えていかなくてはいけないところですけれども、他の大学と同じようなことをしていてはなかなか新しいことは生まれませんので、例えばロボティクスならＡＩとの応用に関してどの部分に集中していくかというところに力を入れて進めようと思っています。ＡＩそのものはものすごく最先端を行っているので、

それを秋田大学単独でやるのは非常に難しいところがありますから、応用分野でどうしていくかというのが一つの方向性だと思います。

あとは最近、医療関係でも寄附講座という形で、求めている企業あるいは自治体から資金を頂いて、それに合った教員を採用する形での地域貢献も積極的に進めようと思っています。例えば医療関係では今、総合診療医が求められています。そういった人材を育成する目的で、男鹿市と仙北市と協定を結んで寄附講座を頂き、そこで育成する仕組みを少し強化しようという形をとっています。それから、ＤＯＷＡホールディングスさんからも寄附を頂いて、資源関係の寄附講座を作っています。

外部資金ではネーミングライツやクラウドファンディングにも取り組み始めたところで、そういった形で活用できる資金をできるだけ多く得て、予算を増やしていこうと思っています。

佐藤　自社の技術力向上のためにはどうしても企業単独ではできない部分があります。企業と大学が連携して、加えて企業から一定の外部資金を得て、技術のレベルアップにつなげていくのは非常に大事なことではないかと思います。特に種平小学校の件は全国的にも注目されていて、モーターを全国から来て評価できるという話がありましたけれども、決してクローズドになっているわけではなく、オープンにしているところがすごいと個人的に思いました。

南谷　ありがとうございます。それから、今までは大学教員になるには、論文をいくつ書かなければいけないとか、高いハードルがあったのですが、私は医学部なので、私の目から見ると企業の中にも技術者や研究者として優秀な方がたくさんいます。そういった方たちにどんどん大学に入ってきてもらって、実務家教員という名前になりますが、学生に教えてもらって、あるいは大学と一緒に連携もできます。企業に大学教員が行くこともありますし、企業の方に大学の中に入ってきていただいて連携を深めることによって、さらにいろいろな新しいイノベーションが生まれるのではないかと思っています。

もう一つは、そういった形で企業の方が大学の中に入っていただくと、学生はその企業に親近感を持ちますから、県内に就職してくれる学生も増えるのではないかと思っています。

８　県内企業・地域住民の大学の活用について

佐藤　今お話があったように、大学からだけでなく企業あるいは住民からも、秋田大学をもっと理解して、同じ目線で社会課題の解決に当たっていくことが非常に重要だと考えられます。例えば県内の企業や地域住民の方に、大学の活用ということで伝えたい希望等がございましたら教えてください。

南谷　あらゆる意味で、地方にある大学は地域貢献が求められています。国からも、地域貢献をして、地域の産業を育てて、人材を輩出することが求められています。どうしても大学というと学問の場所ということで硬いイメージがあると思うのですが、その垣根は低くして、壁を取り払って、秋田県と一体となって発展していきたいと思っています。

医療に関しても、大学病院というと敷居が高いところがあると思いますけれども、そこにもどんどん来ていただきたいと思いますし、医工連携に関しても、企業の方は医療が遠いように感じるかもしれませんが、秋田大学では企業の方に一緒に入っていただくことで新しい医療を生み出そうという機運が高まっています。ですから、来ていただければ、私自身が先頭に立って病院の中もお見せしますので、よろしくお願いします。

それから、資金的には今は高等教育に対する国の予算が抑えられているので苦しい状況です。そういったところは、頂いた資金以上のお返しは必ずしますので、仲間と思っていただいて一緒にやっていければと思っています。

佐藤　実際に海外の大学では、企業との共同研究でかなりのお金を調達するようなところがありますけれども、学長がお話しされたとおり、国の交付金が年々少なくなってきてしまうとなると、大学もそういったところに目を向けるためには、もっと外向きになって、いろいろと企業の方や地域の方々との接点を持っていくということが大事だと思います。秋田大学ではそうした機運がだいぶ高まってきているということですね。

南谷　はい。あらゆる分野で一緒にやっていきたいと思いますので、遠慮しないで、こちらも遠慮しないので、お互いに仲良くなって一緒に成長していきたいと思っています。

佐藤　昔から比べると大学も相当オープンになってきて、秋田大学だけでなく、例えば秋田県立大学ともいろいろな共同的なことをされていますし、単独というよりは様々な部分でオープンに、いろいろなところと連携してやっていくことが大学側にも求められています。それを秋田大学としても進めているということですね。

南谷　そうですね。

佐藤　いずれにせよ、秋田大学は地元への貢献という点で捉えていくと、やはり人材の輩出、技術レベルの向上といったことへの責務は相当大きいと思います。そうした部分で秋田大学に対する期待は非常に大きいものがあると思いますので、よろしくお願いしたいと思います。ありがとうございました。

南谷　ありがとうございました。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

本稿は、2024年11月11日に秋田市内のパーティーギャラリーで行われたインタビューをまとめたものです。

（文責：秋田経済研究所）